

W・C・ミッチェルの生涯と業績 (2)

—ミッチェル研究序説—

佐々野 謙 治

IV

1903年に処女作・『緑背紙幣の歴史』(A History of the Greenbacks, with Special Reference to the Economic Consequences of Their Issue: 1862-65) を出版したミッチェルは、同年シカゴ大学を去り、彼の大学時代の教師であったミラー (Adorph C. Miller) の求めに応じてカリフォルニア大学に移った。以後この大学でミッチェルは、「彼の人生の黄金時代としてふり返るのを常とした」¹⁾ 約10年の歳月を過ごすのである。この間ミッチェルは、「彼自身の基準からしてさえ実によく仕事をした」²⁾ と言われているように、実に精力的に研究に取り組んだ。しかしだからといって彼は、単にがむしゃらに研究にのみ専念していたわけではない。当時の大学人が一般に従っていた伝統的思考習慣に対立し、何かを新しく生み出そうとしていたミッチェルが³⁾、「知的には幾分孤独で、かたくなになりがちであった」⁴⁾ ことは確かであろう。しかし「西部の太陽と、新しい大学の気安く気持のよい同僚達」⁵⁾ が、彼を温かく包み込んでいた。彼はテニスをやリ、ビリヤードに興じ、ダンスパーティを楽しんだ。それに彼は山登りもした。「仲間の一人が言うに、ミッチェルのかたくなさは、連山の頂を越すにつれて、玉葱の皮がむけるように消えていった。」⁶⁾ こうした中でミッチェルは、彼の学者としての名声を不動のものにした大著・『景気循環』を執筆し、それを1913年に出版したのであった。また、当時カリフォルニア大学の英文学の助教授兼女子学生監であったルシイ・スプレীগ (Lucy Sprague) と恋愛中であった彼は、ついにその愛の実りを得て、1912年に結婚し

た。まさにカリフォルニア大学で過ぎたミッチェルの歳月は、「彼の私生活にとっても研究生活にとっても、決定的な意味をもった歳月であった」⁷⁾と言えるであろう。ミルスはこう述べている。「結婚と景気循環の研究の完成とは結びついて、ミッチェルの生涯の一時期の終りと、もう一つの時期の始まりを示した」⁸⁾と。

さて、カリフォルニア大学に赴任してミッチェルが直ちに取り組んだのは、『緑背紙幣の歴史』で試みた研究をさらに拡充するということであった。つまり彼は、緑背紙幣下の貨幣価値・価格の変動の実証的研究を、1862—65年という南北戦争直後から1879年の正貨支払い再開の時期にまで押し広げて行ったのである。こうして生み出されたのが、『緑背紙幣の歴史』の第Ⅱ巻——かくミッチェルは呼んでいる——に当たる『金、価格および賃金』(Gold, Prices, and Wages under the Greenback Standard)であった。それは、1907年の6月末に完成され、1908年に出版された。出版と同時にそれは、「学問的な偉大な作品と認められ」たのみならず、今なお1862年から1878年にかけての権威ある資料として役立っている」⁹⁾のである。しかし、「一方で広く一般化を求めるが他方で経験に基づくもののみを進んで受け入れようとする精神の持主」¹⁰⁾であるミッチェルには、その著作も『緑背紙幣の歴史』と同様に余り満足のいくものではなかった。何故か。以下その理由を簡単に見ておこう。

ミッチェルは『緑背紙幣の歴史』を断片的な性格の論著だと解していた。それは、この著作が価格の急激な変化をみた南北戦争直後のみを問題にしてそれ以後を問題にしていなかったこと、またこの著作が南北戦争インフレを内外での何世紀かにわたる同様のエピソードと比較していなかったことによる。『金、価格および賃金』では、その『緑背紙幣の歴史』のもつ二つの欠陥のうち最初のそれが正されており、なお資料取り扱いの技術的な面での改良や改善も確になされていた¹¹⁾。しかし、これといって両著作の間に本質的な点での違いはなかった。かくしてミッチェルは、『金、価格および賃金』も「これから書かれるべき書物の統計的道具」¹²⁾にすぎない、と解したのである。

ところで、緑背紙幣期の貨幣価値・価格の変動についての詳細な実証的研究

を押し進めていくかたわら、ミッチェルは余暇の多くの時間をさいて、経済制度や観念の歴史についての研究を行っていた。この研究は彼を一段と民族学や哲学の研究におもむかせたが、これらの研究とりわけ民族学の研究を通して彼は、「経済生活において貨幣の果たす役割の重要性」を認識した。そしてこのことが、彼の経済学についての考えを広げる契機となり、つまるところ貨幣経済や価格システムといった問題に彼を注目せしめることになった。『金、価格および賃金』の終章に次の叙述が見られるゆえんである。

「貨幣についての著述家達は常にこう言う。貨幣は……として役立つ三つの機能を果たす、と。しかしながら、こうして貨幣の機能をいかに数えあげても、貨幣が経済生活において果たす役割の重要性は決して示されない。その役割を理解するには、貨幣そのものよりもむしろ、価格の複雑なメカニズムに注意が向けられなければならない……経済活動において価格のメカニズムを利用する者は、その論理に従い、できるだけその技術的要求に適應することを強いられる……価格変動についての最も明白な考えは、その変動を、不換紙幣の流通によって生み出される貨幣的条件に企業社会が適應しようとする努力によって引き起される変化だ、と見なすことから得られよう……経済理論家は、ある種の価格の変化が他の種のそれに遅れることを、事象の＜自然的＞過程からの逸脱だ、と恐らく見なすにちがいない。だが……経済史家は、価格調整の不完全さからよりも、さまざまな財の価格が変化させられるシステムと速度からが、ずっと強い印象を受けるだろう。¹³⁾」

ここに言う経済理論家と経済史家が他ならぬミッチェル自身であるとすれば、バーンズが述べているように、今やミッチェルは「相互に依存している価格システム」(An Interdependent System of Prices)という考えに達したのである。そして、緑背紙幣期¹⁴⁾の1862—78年という経済変動が大規模かつ多様な時期の統計資料をつぶさに検討した彼は、その「相互に依存している価格システム」は、均衡ではなくて「景気循環」を引き起す、と考えるに至った。こうして彼にあっては、価格システムつまり貨幣経済と景気循環とが結びつけられたのである。ちなみに彼は、「恐慌と不況」と題して、1905—6年に初めて貨幣経済と景気循環との関係を問題にした講義を行っている¹⁵⁾。

講義と言えば、カリフォルニア大学でのミッチェルは、彼の好きな題目を彼の関心のおもむくままに自由に選んで行うことができた。当初彼は、原始文化

についての講義を行った。それは「基本的な經濟慣習や制度の起源およびその初期の發展」を問題にしたものであった。この經濟の起源についての講義を彼は、現在の支配的經濟制度ないし組織についての講義をなすことで補完した。この経験が現代社会における金銭的影響力の強さを浮きばりにした。そこで彼は、銀行の理論と歴史についての講義を行い、人間の遠い過去と金銭的制度の現在の機構とを関連づけようと試みた、等々¹⁶⁾。

とまれそうした講義の試みからもうかがえるように、ミッチェルの当時の主たる関心は、貨幣經濟・価格システムの進化や、現在の支配的經濟制度およびそれらの相互關係といったものに向けられていたのである。彼の解するところ、人間社会は貨幣所得の獲得とその支出を基にして徐々に經濟制度ないし組織を發展させてきた。財を生産する人間行動と財を消費する人間行動との間には、今日、金融の機構や価格の広大な網の目が介在している。この網の目つまり「価格の相互關係」が、何をどれだけ生産するかを規定する。のみならずそれは、生産物の分け前をも規定する。とすれば、經濟生活を理解する鍵は貨幣であり、従って貨幣が經濟学の根幹をなすべきだ。こう解してミッチェルは、「貨幣の歴史の過去のエピソードに関する詳細な研究」から「貨幣經濟」を問題にした壮大なテーマに転じ、『貨幣經濟の理論』(Theory of the Money Economy)を書き始めたのである。この点で、ミッチェルはヴェブレンの影響を強く受けていた。クラーク(J. M. Clark)あてに彼が書いた手紙の一節に次の叙述が見られるゆえんである。「ヴェブレンの＜産業的職業と金銭的職業＞に関する論文は、私の目を開くのに大いに關係があった。やがて私は、価格システムとそれが近代經濟生活に占める位置について研究し始めていました。」¹⁷⁾ こうしてミッチェルは『貨幣經濟の理論』の原稿を書き始めたのであるが、それは『金、価格および賃金』が完成した1907年の6月末のことであった。

『貨幣經濟の理論』は、いかに貨幣經濟が他の文化的諸局面と密接にからみながら進化してきたかを示すことによって、貨幣が近代經濟生活において果たす役割の重要性を人々に理解させようとしたものであった¹⁸⁾。何よりもそれは、ミッチェルにはめずらしく、統計を全く使わない理論的論考であった。しかし

この原稿書きは1908年の3月で中断された。同年の4月にミッチェルは、移民委員会（The Immigration Commission）の仕事を引き受け、夏の間をもっぱらその仕事に没頭したのである。続く秋にはハーバード大学に出校し、そこで彼は翌年の秋まで貨幣と景気循環についての講義を行った。この間もまた彼は『貨幣経済の理論』の原稿を書く時間的余裕を見出しえなかった。それでも彼は、多くの量の歴史的資料をあさり、統計的記録とりわけ恐慌に関する記録を検討した。ところが、そうこうするうちに彼は、『貨幣経済の理論』の原稿のもつ思弁性に不安を覚え始めた。そこで彼は計画を変更し、運命的な方向転換を行った。それは「従来の経済学者達が彼らの一般理論から切り離して＜恐慌＞の章で取り扱っていた価格の反復的再調整」の問題に取り組むことであった¹⁹⁾。かくして「＜貨幣経済＞の準備作業として＜景気循環＞の問題」²⁰⁾を早急に解決しようとの決意を抱いたミッチェルは、その決意を胸に1908年の秋には再び——どうやらハーバード大学の学風は彼にはなじめなかったらしい——カリフォルニア大学にもどったのである²¹⁾。以後『貨幣経済の理論』の原稿執筆は中断されたまま、永久にその完成をみることなく終るのである。

その点に関してバーンズは次のように述べている。もしミッチェルが、従来の多くの経済学者達のように思弁的なやり方で、彼の貨幣経済に関する考えを押し進めていたなら（つまり『貨幣経済の理論』の原稿を書き続けていたなら）、彼は歴史に残るすばらしい経済理論をものにしてにちがいない。しかし彼の歩いた道は異なっていた。社会・経済問題を科学的にとらえさせるような理論を展開しようとしたミッチェルは、貨幣経済の最も技術的な側面つまり景気循環の現象の解明に立ち向かうことになった²²⁾、と。景気循環を「最も有益な経済理論を構築するのに必要な序説・導入をなすもの」²³⁾と解したミッチェルは、以後もっぱら経済学上の問題を景気循環の問題に限り、包括的な学問体系を残すことなく終ることになる。「彼の名をかぶせた＜原論＞がない」²⁴⁾と言われるゆえんである。

さて、カリフォルニア大学にもどったミッチェルは、直ちに景気循環の研究に取りかかった。1909年の9月3日に彼は、景気循環に関する大まかな輪郭を

素描した。同月の15日にはアシスタントを彼は自費で雇った。それは、『緑背紙幣の歴史』ではわずかにせよ注意を払っていたが、『金、価格および賃金』では省略していた問題、つまり利子率についての表を作成するためであった。1909年の12月にはミッチェルは、以前の彼の研究では無視されていたもう一つの問題である証券価格の問題に取り組む準備ができた。彼はその知識が不充分であった問題に着手すべく、一定の計画に従って研究を進めていった。こうして彼は、貨幣経済の産業的活動を形成し推進すると思われた「価格の反復的再調整」に関する包括的な研究を行う決心をなすに至った。あたかも熱に浮かされたかのように研究を押し進めていたミッチェルには、彼が取り組んでいる膨大な量の資料も意に介するところではなかった。彼は経済活動の重要な局面のすべてをとらえようと努めたのである。この努力は、1890年の統計にまで遡ってなされ、しかもそれは、貨幣経済が充分に発展していた四ヶ国、つまり合衆国やイギリス、ドイツ、フランスにまで及んでいた。必要とされた商品価格、賃金、仕入れ価格等々についての統計が見い出されないため、ミッチェルは広範囲にわたって試算を試み、この面で新しい分野を切り開いた。彼は事務的な仕事の多くを自分で行い、そのすべてを自ら検討したのである。彼が取り出した事実に基づく情報は極めて広く、かつ彼が調べた理論的著作や論文は実に多かった。しかし研究は順調に進められていった²⁵⁾。

1911年の4月3日の友人宛の手紙にミッチェルは次のように記している。「説明上の種々の困難は、私がある問題に接近すると、ひとりでに解決するかに思われます」と。もちろん時として後退もあった。1911年4月17日にミッチェルが友人に出した次の手紙の一節は、その模様を伝えたものである。「恐慌それ自体を論議する点に立ち至った今や、私は全く困り果てております。あらゆることがすべて同時に生じ、それを秩序だてて説明することは、私が想像していたよりもずっとむづかしいのです。」後退はしかし一時的なものであった。二週間たつたないうちに恐慌の章の草案がつくられた。ミッチェルの喜びは大きかった。この喜びを彼は1911年5月2日の友人宛の手紙にこう記している。「私自身の印象からすれば、その諸章がむしろ良いのです。特に恐慌を取り扱

った非常にむづかしい章がです」と。書き直しと再検討が数ヶ月続いた。そして遂に1912年の10月にミッチェルは最終稿を印刷所に送ったのである。この時、結婚(ミッチェルとルシイ・スプレーグの結婚式は1912年5月8日サンフランシスコの小さな教会でなされた)²⁶⁾と同時にカリフォルニア大学を辞職していた彼は、新妻と一緒にヨーロッパをハネムーンの旅行中であった。この旅行中にも原稿の校正は続けられたが、とまれここに、『景気循環』(Business Cycles)は完成されたわけである²⁷⁾。

以上、3年という実に驚くべき短期間にミッチェルは、「世界の経済学の文献における傑作の一つ」²⁸⁾を書き上げたのであった。のみならず彼は、その『景気循環』を書き上げる過程で、他のすぐれたいくつかの業績も生み出した。「経済活動の合理性」(The Rationality of Economic Activity, 1910)や「貨幣支出の未開の方法」(The Backward Art of Spending Money, 1912)という有名な論文、景気循環の研究から生じてくる技術的な問題についての論文、また国家通貨委員会(The National Monetary Commission)の何巻にも及ぶ公刊物についての書評等がそれである。確かに「カリフォルニア大学でのこの最後の数年……ミッチェルは彼自身の基準からしてさえ実によく仕事をした」と言えるわけだ²⁹⁾。

<注>

- 1) Frederick C. Mills, Professional Skefch, in Arthur F. Burns (editor), Wesley Clair Mitchell: The Economic Scientist, National Bureau of Economic Research, Inc., New Yonk, 1952, p. 111. 以下、当著作は、略して(W)と記す。なお、当著作に収録されている諸氏の論文からの引用はすべて、論文執筆者名と該当頁のみを記すことにする。例: Josep Dofman, (W), p. 127.
- 2) Arthur F. Burns, (W), p. 15.
- 3) この点, Letter to Sprague, October 18, 1911, in Lucy Sprague Mitchell, (W), p. 68を参照。
- 4) 5) 6) Frederick C. Mills, (W), p. 111.
- 7) Arthur F. Burns, (W), p. 15.
- 8) Frederick C. Mills, p. 111.
- 9) 10) Arthur F. Burns, (W), p. 17.
- 11) 『金、価格および賃金』では、単に資料操作上の技術的な改善や改良がなされているだけではない。バーンズによれば、「そのページでは生き生きとした経済分析がなされており、最後の章は全くそれに捧げられている。『緑背紙幣の歴史』では気

にされながらもあいまいなままにされていた、金プレミアムと卸売価格との間の因果連鎖が、ここでは、大家にふさわしく注意深く展開されている。もう一つの理論的貢献は、反応の遅れ——金価格に対する卸売価格の、卸売価格に対する小売価格の、小売価格に対する生活費の、生活費に対する賃金の上昇の遅れ——を一般化していることであり、またその諸反応のシステムを統一的に説明しようと試みていることである。」(Arthur F. Burns, ㊦, pp. 17—18)。

- 12) Arthur F. Burns, ㊦, P. 17.
- 13) Gold, Prices, and Wages under the Greenbacks Standard, University of California Publication, in Economics, V.I. 1908, p. 279, pp. 281—283.
- 14) 「南北戦争(1861—64年)は……アメリカ産業資本の馬腹に加えられた拍車の役割を果たした」(小原敬士『アメリカ独占資本主義の形成』岩波書店, 昭和28年, 10頁)と言われているように、ミッチェルが貨幣価値・価格の実証的研究を試みた1862—78年の間は、アメリカ産業資本の急速な確立・発展をみた時期であった。そしてまた、バーンズも指摘しているように、その間のアメリカは、二度の恐慌をさしはさんで、好況と不況という一定の時間的継起を伴った経済の大変動を体験した時期でもあった。(Arthur F. Burns, ㊦, P. 18).
- 15) このパラグラフは, Arthur F. Burns, ㊦, p. 16, p. 19, p. 20 を参照。
- 16) このパラグラフは, Arthur F. Burns, ㊦, P. 16 を参照。
- 17) Letter to J.M. Clark, August 9, 1928, in Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p. 97.
- 18) Letter to Spargue, November 9, 1908 in Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p. 70 を参照。
- 19) Letter to J.M. Clark, August 9, 1928, in Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p. 97.
- 20) Letter to Sprague, November 9, 1908, in Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p. 66.
- 21) このパラグラフは, Arthur F. Burns, ㊦, p. 21 を主に参照。
- 22) Arthur F. Burns, ㊦, pp. 26—27.
- 23) Letter to Sprague, Noveber 9, 1908, in Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p. 66.
- 24) Frederick C. Mills, ㊦, p. 119.
- 25) このパラグラフは, Arthur F. Burns, ㊦, p. 22を参照。
- 26) Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p. 84.
- 27) このパラグラフは, Arthur F. Burns, ㊦, p. 22 を参照。
- 28) Arthur F. Burns, ㊦, p. 22.
- 29) Arthur F. Burns, ㊦, p. 15.

V

ミッチェルの『景気循環』は1813年に出版された。それは、600頁を越す4つ折版の大著で、内容的には次の三部から成っていた。つまり、第一部の「問題とその設定」は、「当時の一般的に受け入れられていた主要な景気循環諸学説

の要約、貨幣・経済機構の素描、1890年から1911年までの合衆国やイギリス、フランス、ドイツにおける循環的変動の年々の説明」から成っていた。続く第二部は、統計的資料とその分析から成っていた。そして最後の第三部は、第一部と第二部によってなされた観察から織り出された理論から成っていた。この最後の理論的部分つまり「事業活動のリズム」は、「景気循環内部で進行する事態のリアルな説明」を提示したものであった¹⁾。

そうした『景気循環』におけるミッチェルの主な目的は、貨幣経済の技術上の急務・要求が経済活動を絶えず交互に拡張させたり収縮させたりしている様相を示すことにあった。つまり、景気循環の理論は、「活動の端初的な回復が発展して完全な好況となり、好況が次第に恐慌を生み出し、恐慌が徐々に不況に転化し、(そして)不況が……最終的には活動の新たな回復を生み出す」という過程を、従って「それによってひと組の事業諸条件が別のひと組に転形してゆく累積的な変化の過程を、分析するものでなければならない」²⁾と言うのであった。その分析をミッチェルは主として広範かつ詳細な統計的研究に基づいて行ったのである。それは、ミッチェルが現実過程の諸要因を包括的にとらえようとしていたからであり、何よりもここで取り扱われる問題そのものが量的な性格のものであったからだ。また「統計的資料の選択、提示の方法および諸結果の調整」の指針として、ミッチェルは、「理論的著述家や金融雑誌から借りた諸概念」を用いた。しかし、すべての統計表も借りられた諸概念も、「今日の経済組織の研究から得られた構想」に調和するようにされていた。その構想は、「財を作る産業過程と財を分配する商業過程とが、ともに金をもうける営利企業の過程に完全に従属させられている」³⁾ことを示すものであった。(これは多くの論者が指摘しているように、ミッチェルがヴェブレンから受け継いだものであった)。従って『景気循環』におけるミッチェルの議論の全体は、「利潤の見込」を中心に展開されたのである。

確かに「時には、その中心的関心事がもっとぬきさしならない問題——破産の回避という問題——にかき消されることもある。だが利潤をあげるといい、破産を回避するといっても、同じ一つの問題の二つの側面であるにすぎない。」

やはり問題の中心が「利潤の見込み」であることには変りはない。しかし最も重要な要因は、「事業収入をなす価格や事業支出をなす価格、支配的な利潤の幅で得られる売り上げ高、支払いを行うために現金をもっておくことの必要性、銀行や投資家から充分な額を獲得する必要性」といったものだ。もっとも、これらの要因が何であるか知ったとしても、それだけでは不十分である、とミッチェルは言う。極めて困難ではあるが、「利潤の見込みをあるいは明るくしあるいは暗くする、また支払能力の維持をあるいは容易にしあるいは困難にする有為転変を貫くこれらの要因の相互作用を追求しなければならない」のである⁴⁾。かくしてミッチェルの景気循環の研究は、貨幣経済の動きに応じた検討に絶えずさらされ、また彼の著作は、より多くの資料や仮説が現れるにつれて絶えず改訂されることになるのだ。事実ミッチェル自身が、後に見るように、彼の『景気循環』の拡充・一新に努めることになるのである。

なお付言すれば、『景気循環』の中には、ミッチェルが社会問題や社会福祉に関心を示していたことが現れていた。その書物の最後の章は、「＜物事の貨幣的表面＞とその下で進行すること」と題されていたが、そこで彼は、いかに景気循環が社会福祉に反作用するか、つまりいかにそれは広範囲に及ぶ失業を通じて人間の不幸を生むか、いかにそれは富や所得の分配を不平等になすか、等々の問題を論じているのである⁵⁾。すでにバーンズの指摘に見たように、もともとミッチェルが景気循環の研究に立ち向ったのは、その研究が社会問題を科学的につかませるのに役立つ理論を構築する導入ないし前提になる、と解されたからであった。

ところで、『景気循環』に対する諸学者の評価は極めて高いものであった。バーンズはこう言う。ミッチェルの『景気循環』は、鮮やかに編まれた・綿密に推論された論著である。否、それ以上のものだ。つまりそれは、経済学における一つの記念碑となるものである。マーシャルの『原理』とケインズ(Keynes)の『一般理論』との間にあるいかなる著作といえ、西洋世界の経済思想にこれ程大きな影響を及ぼしたものはかつてなかった⁶⁾と。ドーフマンの評価もまた高い。「その本(『景気循環』)は、画期的なものであった。それは、詳細な量的

研究の驚く程の可能性を示したのみならず、経済秩序を景気循環の局面から見るという考えを生じさせた……やがて経済学の文献では、人は＜商業恐慌＞を言々するのではなくて、＜景気循環＞を言々するようになった。その書物の最大の貢献の一つは、恐らく次の事実にある、つまりそれが、一般的過剰生産があるという企業社会の信念と、その信念を否定する主流派経済学との間にあるギャップを埋めようとする最初の得心のいく試みであった、という事実にある。」⁷⁾ またハロッドは、「景気循環現象の観察から極めて経験的な法則を抽出することにあらん限りの努力を注いでいるウェズレイ・C・ミッチェル教授の仕事ほど有益なものは、おそらく、経済学の分野では皆無に近いであろう」⁸⁾ と評している。クラークによる評価も同様だ。「もしアメリカ経済における計量的研究の現在の動向を示す＜形態的類型＞として、ただ一つの研究が選ばれるとするならば、その栄誉は確かにウェズレイ・C・ミッチェル教授の景気循環の研究に属する。」⁹⁾

以上の諸評価を得ている『景気循環』の出版は、当然のことながら、直ちに学会や社会の注目を引くこととなった。(それまでのミッチェルは余り世に知られた存在ではなかったらしい)。ここに早くもミッチェルは、種々の大学から求められる存在となった。つまり、コーネル大学のウィルコックス (W. F. Willcox) はミッチェルを正教授として求めてきた。またエール大学のフィッシャー (Fisher) は彼を研究教授として、コロンビア大学のセリグマン (Seligman) は彼を経済学史の教授として熱心に求めてきたのであった¹⁰⁾。ところでミッチェルは、かねてからニューヨークで生活することを願っていた。「貨幣経済の中枢を間近に見てみたい」¹¹⁾ と思っていたからである。ミッチェルはこう述べている。「私が研究したい人々と諸制度は、この世界の他のどこよりもニューヨークにより多く見い出される」¹²⁾ と。そこで、新妻とのヨーロッパ旅行を終えて帰国した彼は¹³⁾、ニューヨークに住いをかまえ、1913年コロンビア大学へ奉職することとなった。以後彼は、新社会科学学院 (the New School for Social Research) との3年間の関係期間 (1919—1922) を別にすれば、1944年に名誉教授として退職するまでの31年間で、コロンビア大学で過ごすことになる。こ

の間、1920年に国民経済調査会 (National Bureau of Economic Research) が創設されるや、ミッチェルはそれに係わりあったが、この関係は彼の死ぬまで続くのである。

<注>

- 1) W.C. Mitchell, *Business Cycles and Their Causes*, Berkley, 1941, 種瀬・松石・平井訳『景気循環』新評論, 1972年, 1—2頁を参照。但し訳文は必ずしもそのままでない部分もあるが、当著作からの引用は以下すべて訳書の頁のみを記すことにする,
- 2) 上掲訳書, 5頁。この引用に見られるように、ミッチェルは「累積的变化」ということを強調したのである。小原氏は言う。「ミッチェルは経済の静態均衡分析のかわりに動態の累積的過程の研究を重視する点において、明らかにヴェブレンの流れを汲むものであった」(小原敬士『アメリカ経済思想の潮流』勁草書房, 昭和26年, 217頁)と。こうした解釈が全く誤りだと言うのではないが、以下のホーマンの立言に注目しておきたい。「ミッチェルの理論は、<静態的>と言えるかもしれない。つまり彼は、<過程>とか<累積の因果関係>とかの概念を用いるが、その目的とするところはヴェブレンのように経済活動が行われる制度の進化の叙述ではなく、所与の制度的状況内で事業が蒙る変化の叙述なのである。彼の研究に関する限りでは、制度は極めて可変的な要素ではなくて、比較的不変的な要素なのである」(P. T. Homan, *Contemporary Economic Thought*, 1968, p. 405)。
- 3) W.C. Mitchell, *Business Cycles and Their Causes*, 1941, 種瀬・松石・平井訳『景気循環論』新評論, 1972, 183—184頁を参照。この構想はミッチェルがヴェブレンから受け継いだものである、と多くの論者が指摘している。しかしその意味・内容が必ずしも正しく継承されていたわけではない。この点については、さしあたり、拙稿「ヴェブレン、コモンズ及びミッチェル」第一經大論集, 第8巻 第2号, 1—31頁の参照を乞う。
- 4) 上掲訳書, 8頁を参照。
- 5) 上掲訳書, 225—230頁を参照。
- 6) Arthur F. Burns, ⑧, p. 23.
- 7) Joseph Dorfman, ⑧, p. 133.
- 8) R.F. ハロッド著, 宮崎・浅野訳『景気循環論』東洋経済報新社, 昭和50年, 44頁。
- 9) J.M. Clark, Prefce to *Social Economics*, New York, 1967, p. 360.
- 10) Lucy Sprague Mitchell, ⑧, p. 86.
- 11) Arthur F. Burns. ⑧, P, 27.
- 12) Letter to Sprague, November 6, 1911, in Lucy Sprague Mitchell, ⑧, p. 70.
- 13) このヨーロッパ旅行中にミッチェルは、彼の妻の記すところによれば (Lucy Sprague Mitchell, ⑧, p. 85), 次の人々に会っている。Francis Y. Edgeworth, Sidney Balls, John Hobson, Arthur Bowley, G.B. Diblee, Hartley Withers, J. F. Muirhead, J.R. Cahill, William Beveridge, Sidney and Beatrice Webb, Graum Wallases.

VI

さてミッチェルが赴任した当時のコロンビア大学の経済学部は、決して大きなものではなかった。しかしそこには、クラーク（J.B. Clark）をはじめ、セリグマン（Seligman）、シーガー（Seager）、シンコウヴィッチ（Simkhovitch）。ムーア（Moor）等の錚々たる経済学者達が揃っていた¹⁾。1913年、かかる教授団の一員となったミッチェルは、依然として彼の持続的な研究の関心事であった景気循環に関する講義と、経済理論の諸型態と題された経済学史の講義を行った。「ミッチェルは景気循環を経済理論への導入をなすものだと解していた。この景気循環の研究の完成（1913年の『景気循環』の出版を指す）は、ミッチェルに、彼がそれまでに行っていた以上に経済理論を体系的に検討し評価する機会を与えた。」²⁾ここに言う検討と評価を、ミッチェルは、経済理論の諸型態と題した経済学史の講義で試みたのである。その模様については後にまた取り上げることにして、ここでは、コロンビア大学に赴任してから国民経済調査会と係わるまでの間にミッチェルがあげた研究業績と、彼がなした諸活動について見ておきたい。

1914年に経済学における歴史的研究の重要性を強調した「人間行動と経済学」（Human Behavior and Economics）という論文を書いたミッチェルは、当時の英語圏では余り知られていなかったウィーザー（F.V. Wieser）に深い造詣を示した「ウィーザーの社会経済学」（Wiser's Theory of Social Economics）という論文を1917年に書いている。また、この年の前後に彼は、「経済理論における貨幣の役割」（The Role of Money in Economic Theory, 1916）や、「ベンサム幸福計算」（Bentham's Felicific Calculus, 1918）³⁾ という有名な論文を書いている。この最後の論文は、もともと経済理論の諸型態という書物の一つの章として計画されたものであった、と言われている。その書物を彼は1916年に書き始めていたが、しかしそれは、1918年に彼が合衆国政府の戦時産業局（The War Industries Board）の仕事にたずさわったことで中断された。以後その書物は完成されることなく終るのだが、当時ミッチェルが書い

た論文は以上につぎない。

1914年に労働統計局からの卸売価格の指数に関する原稿を依頼された彼は、翌年の1915年に「指数の作成と使用」(The Making and Using of Index Numbers)を書いてそれに答えている。「この研究は、合衆国においてもその他の外国においても、統計の理解と実践に大きな影響を及ぼした」⁴⁾と言われている。この論文を作成した後、引き続きミッチェルは在庫価格の指数に関する研究と取り組んだ。この結果は「在庫価格の指数に関する批判」(A Critique of Index Numbers of the Prices of Stocks)と題されて、1916年の政治経済学雑誌に掲載された。また1910年から1916年の間にミッチェルは、同じく政治経済学雑誌に証券価格に関する6つの論文を書いている。「これらの諸論文は、この領域でなされた後の研究や実践の多くの基礎とされるようになった」⁵⁾と言われている。

以上に見られるように、国民経済調査会と係わるまでのコロンビア大学におけるミッチェルの研究は、主に価格の実証的研究と経済理論の批判的研究とを中心になされた、と言ってよい。しかし彼は、単にそうした研究にのみ没頭していたわけではない。コロンビア大学に赴任してからのミッチェルは、種々の社会問題と取り組んだ。セツルメント、婦人の参政権、教育の改善、成人教育等々の問題がそれだ。(すでに見たように、ミッチェルの社会問題や社会福祉への関心は、彼の『景気循環』の中に示されていた)。1918年、「現存する秩序の発生・成長・現在の機能について、またその修正を助長するような現在の状況について、偏見にとらわれない理解を求めること」⁶⁾を目的として、ニューヨークに新社会科学学院を設立する動きが起きるや、ミッチェルはヴェブレンらと共にその創設に尽力した。のみならず彼は、翌年の1919年にはコロンビア大学を辞職して当学院の講師となった。スタッフには、ミッチェルの他、やはりコロンビア大学を辞職してきたビード(C. A. Beard)やロビンソン(J. H. Robinson)、それにヴェブレン⁷⁾らが迎えられていた。また当学院へは、コロンビア大学在職中のデューイ(J. Dewey)も出校し、ラスキ(H. J. Laski)、ワラス(G. Wallas)、ウォルマン(Leo Wolman)、アーズルーニ(Leon Ard-

zrooni) らも、そのメンバーに加わっていた。かかる人々の中にあつてミッチェルは約3年の間を新社会科学学院の「4巨頭」の一人として活躍したのである。こうした諸活動に注目すれば、確かにミッチェルは「根っからの社会改良家」⁸⁾であつた、と言えるだろう。しかし、彼は決して即席の社会改良を信じていたのではない。社会改良は「社会過程の科学的調査や研究」を通してなされるべきだ、というのが彼の考えであつた。つまりミッチェルの社会改革・改良の志向は、彼のいわゆる「量的社会科学への信念」に支えられていたのである。

新社会科学学院に移る前年の1918年12月17日にミッチェルは、バージニア州リッチモンド(Richmond)で開かれた統計学会の80回年次大会で、次のようなスピーチを行っている。それは、ミッチェルの「量的社会科学への信念」を明白に表明したものであつた。以下それを少し長くなるが労をいとわずに引用しておきたい。

「自然科学と産業技術においては……我々は……進歩の大激変に未開人のごとく左右されるということから解放された……科学と産業においては、我々は急進主義者つまりテストされた方法を信頼している急進主義者である。だが社会組織に関する問題においては、我々は依然として未開人のもつ保守的性格の多くを有している……

なるほど＜社会改良家＞は常に我々の身近にいる。と言うよりもむしろ、我々のほとんどがある種の社会改良家だ……それでも社会組織に関する過去の物語は、我々が年月を越えて語り続けたいと思うようなそれではない。扇動や階級闘争による改革は、気まぐれな前進の方法であり、不快かつエネルギーの浪費である。それよりも堅実で確実な進歩の方法を考案するのに充分な知性を我々はいちあわせてはいないのか？

確かに言えることだが、社会組織の現状を維持しようと欲した場合ですら、我々にはそれができなかった。我々は、戦争の危険から抜け出して安全な世界へと向かっているわけではない。逆に世界は危険な状態にある……我々のすべてをとりまとめて巨大な諸国民の一集団中の一人民としてとらえる時、我々が何よりもまず関心を示すのは、全くやっかいなことではあるが、近代産業と日々の交換の無限に複雑な行程を押し進めるある方法を発展させることにであり……しかも我々自身を自らの仕事に興味を抱くようにさせ、その生産物の分配に満足いくようにさせることにである……その目的を達成するのに欠けているのは……良き意志というよりもむしろ知識、なにかんづく人間行動に関する知識である。

未来への我々の最良の希望は、我々の努力の最も進んでいる分野で我々がすでに用いて

いる方法を、社会組織にまで拡大して用いることである。科学や産業においては……我々は我々に新しい方法を強制する大変動を待たなくてもよい……我々はそうした方法を指示す量的分析を信頼し、そしてうまくいったし、さらに我々は進歩をとげるであろう。何故なら、我々はそうした量的分析を絶えず改良し応用しているからだ。

私は、社会科学の発展が我々の社会問題の解決への希望を他のいかなる種の努力よりも多く与えると考えているのだが、そうかといって私は、これらの社会科学が今のままで十分に役立つと主張するのではない。社会諸科学は未熟で思弁的であり問題に満ちている……我々はそれらの社会諸科学が常に成長してたくましい大人になるという確かな保障を何らもちあわせてはいない、例え我々がそれらの社会科学の成長にいかに惜しめない努力を払ってもである……我々の中で社会諸科学に係わった人々は……一つの不確実な事業にたずさわっているのだ。恐らく我々は、人類のためになるいかなる偉大な財宝も得ないであろう。しかし、それが豊に実を結ぶものか不毛なのかが証明されるまで、我々の有しているすべての知性とエネルギーを用いて、その事業を導き完成させるべく努めること、これが我々の課題である、ということは確かなのだ⁹⁾。」

こうしてミッチェルは「量的社会科学への信用」を力強く主張したのであったが、それはまた国家的規模での統計的資料の整備の必要性を人々に訴えたものであった。ちなみに、このスピーチを行った時のミッチェルは、第一次大戦のために合衆国政府によって設けられた戦時産業局の物価部長の地位にあったのである。

戦時産業局は、「政府の必要とする軍需産業の手形交換所として活動し、軍事をまかなう最も効果的な方法や、生産を増強するための最善の手段を決定する」¹⁰⁾ ためのものであった。しかし当局でミッチェルがなした仕事は、日頃の彼の研究を国家部局のために発表したごときものに他ならなかった。彼は、戦時産業局に動員されていたスタッフと協力して、あるいはそのスタッフの増員を政府に要求さえして、戦時中の価格の動きを調査した。その結果は、『戦時中の価格の動向』(History of Prices during the War)と題されて、1919年に刊行された。それは57の報告書から成っていたが、その中の二つはミッチェルが執筆したものであった。「国際価格の比較」(International Prices Comparisons)と「その要約」(the Summary)がそれである。戦時産業局の物価部における調査が、こうして短期間のうちに「一つの価値ある参考資料」と評され

る一著作にまでまとめあげられたということは、何よりも「ミッチェルの率先力と組織手腕によるものであった。」¹⁾

ところで、経済動員をともなった戦争の体験は、国民所得、在庫品、価格、労働供給およびその他の経済における基本的諸要因に関する正確な量的情報の必要性を、人々に痛感させた。この点でミッチェルの果たした役割は大きかった。今やますます多くの人々が——経験的経済学を信奉しない人々までが——実証的・経験的調査研究を必要だと考え始めていた。そうした空気の中で、国民経済調査会が1920年に創設されたのである。それは、「最も広範かつ最も自由なやり方で、研究や調査や発見を、また（かくして得られた）知識の人間福祉への応用を奨励し、そして特に経済学や社会学、産業科学の分野での正確かつ偏見にとらわれない研究を指導ないし援助する」²⁾ ことを目的としたものであった。この設立目的に先に見たミッチェルのリッチモンドでのスピーチを重ねてみる時、国民経済調査会はミッチェルの志向と全く符合するものであったことがわかる。バーンズによれば、それは、「ミッチェルが青年時代におぼろげに見始めていた夢の実現したものに他ならなかった」³⁾ とさえ言えるものであった。

＜注＞

- 1) Frederic C. Mills, ⑧, p. 111 を参照。
- 2) Frederic C. Mills, ⑧, p. 112.
- 3) この論文は、ベンサムのアリジナリティを、彼のすべての著書を通じて強調されている功利の観念よりもむしろ、方法の側にあるとして、ベンサムの幸福計算を問題にしたものであった（清水幾太郎『倫理学ノート』1972年、68—69頁）。なお、ミッチェルのベンサムについての見解を取り上げて整理したものに、佐々木晃「制度主義者達とジェレミー・ベンタム—W.C. ミッチェルの快楽主心理学批判を中心として—」日大経済科学研究所紀要33) 12月、1978がある。
- 4) Arther F. Burns, ⑧, p. 28.
- 5) Arther F. Burns, ⑧, p. 28.
- 6) このセンテンスは、Joseph Dorfman, Thorstein Veblen and His America, 1934, p. 449 から引用。「ニュースクールは、1919年に、小さなインフォーマルな成人教育センターとしてニューヨーク市で発足した。設立に参加したのは、歴史家チャールズ・ピアード、経済学者ソースタイン・ヴェブレン、哲学者ジョン・デューイらおもにコロンビア大学の進歩的なメンバーだったが、英国の政治学者 H. J. ラスキも初期のスタッフに加わっている。だがニュースクールを真の意味でニュースクールにさせたのは、この学校の創立に加わってから40年間、献身的な努力をささげた経済学者アルヴィン・ジョンソン (1874—1971) である。発足当初のニュース

クールは社会科学のなもののみかたを大人たちに示し、経済・政治問題を幅広いコンテクストでとらえることを教えた。現在は大学院課程をもつ大学に発展しているが、依然として中心はは成人部におかれ、全学生の85%が成人部に登録している。年間登録数は1万8千名で、社会科学を中心に、人文科学・芸術・演劇・ビジネスなど600のコースが用意され、夜間コースは6時から10時まで開かれている」本の周辺—アルヴィン・ジョンソンとニュースクール、雑誌『図書』岩波書店、1976年5月、50頁。

- 7) ニューヨーク時代のヴェブレンは、しばしばミッチェル家を訪れ、家庭的なもてなしを受けている。詳しくは、Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p. 91の参照を乞う。またここには、ヴェブレンとミッチェルの関係についての興味ある叙述も見られる。
- 8) Arthur F. Burns, ㊦, p. 29.
- 9) W. C. Mitchell, Statistics and Government, in The Backward Art of Spending Money and Other Essays, p. 45. p. 47. pp. 48—51. 当論文は最初, Quarterly Publications of American Statistical Association, March, 1919に掲載された。
- 10) C. B. Clarkson, Industrial America and the Worldwar, 1923, p. 37.
- 11) Arthur F. Burns, ㊦, p. 28.
- 12) このセンテンスは、Arthur F. Burns, ㊦, p. 30から引用。
- 13) Arthur F. Burns, ㊦, p. 7.

VII

国民経済調査会の最初の年会は1920年2月2日に開かれた。この年会でミッチェルは研究理事（調査部長）に選ばれた。時に45才であった。以来彼は1/4世紀にわたって国民経済調査会の中心的人物であった。つまり彼は、バーンズ (A. F. Burns), クズネッツ (S. S. Kuznets), キング (W. I. King), ソープ (W. L. Thorp), マコーレイ (F. R. Macaulay), ミルス (F. C. Mills), ハーバラー (G. Haberger) 等の有力な調査会のメンバーと協力し、あるいは彼らを指導して、多くの記念すべき業績を発表することになるのである。研究理事（調査部長）を辞任した後もこの調査会とのミッチェルの関係は続き、彼の学者としての研究調査の仕事は、1948年10月29日の死の直前まで営々として行われることになる。

さて、国民経済調査会の理事会によって決められた最初の研究テーマは、国民所得とその分配の大きさを調べることであった。バーンズによれば、これ程ミッチェルにふさわしいテーマはなかった。もし現代の経済生活が貨幣所得の

獲得とその支出に基づいているとすれば（ミッチェルはかく解していた）、経済の分析はその事実から出発しなければならないからだ。国民所得とその主要な構成部分の大きさを測定することは、動きつつある経済システムの枠組を詳しく述べることである。これこそミッチェルが情熱を注いで研究できる種の問題であった¹⁾。かくしてミッチェルの他、キング（W. I. King）、ノース（O. Knauth）、マコーレイ（F. R. Macauly）等がスタッフに加わり、そのメンバーによる最初の会合が1920年5月17日にもたれた。この会合でミッチェルは、研究者の「自発性と規律」の重要性を説き、国民所得の研究に関してなされるべき基本的な仕事の概略や測定上の若干の方法についての計画について語った。調査研究は順調に進められ、2年足らずしてその成果を調査会はⅡ巻の書物にまとめて刊行した。『合衆国における所得——その大きさと分配』（Income in United States: Its Amount and Distribution, 1909-1919）がそれである。もちろんミッチェルもその代表的な共著者であった。

一年有余で国民所得に関する調査研究をなし終えた国民経済調査会は、1921年の末、次は景気循環の研究を行うことを決定した。当時、景気循環の問題が社会のあらゆる階層の人々にとって極めて重要なものであることは明らかであった。確かに昨今、景気循環に関する多くの研究がなされている。だが「全包括的研究」はなされていない。それを国民経済調査会がやろうというのであった。ここにミッチェルは、調査会の援助を得て、1913年の『景気循環』を発展させることができることになったのである。

その点をミッチェルは次のように述べている。「私の大部な四ツ折版の書物は約10年ほど絶版のままであった。少なくともその期間分だけは時代遅れになったのであり、従ってこの書物を単なる修正版を出すことで現在なされている研究と並ぶところまではもってくることはできない。現在なされている研究に対して私が何らかの価値あるものを付加することができるのであれば、それは新しく一冊の書物を著す以外に術はない、ということがはっきりした。しかし私一人だけの手では、豊富な新しい材料を処理することもできなければ、統計的分析の改善された方法を用いることもできなかった。この私の苦境は国民経済調

査会によって救われた。調査会は、私の必要とした資料を収集し分析することを、また私の知識の間隙を埋めることを、申し出てくれたのである。』²⁾ こうして1922年、ミッチェルの『景気循環』の拡充・一新の作業は、国民経済調査会の援助の下に始められることになった。同年ミッチェルは、彼が当時奉職していた新社会科学学院が主に財政難のために根本的に改組せざるをえなくなったことを契機に³⁾、そこを退職し再びコロンビア大学にもどった。これ以後のコロンビア大学におけるミッチェルについては後に取り上げることにして、ここでは以下、彼の旧著『景気循環』の拡充と一新の過程を見ていきたい。

さて、1913年に出版されたミッチェルの『景気循環』は、何よりも資料が1890—1911年という短い期間に限られていた。またその分析も今となつては不充分なものであった。そこでミッチェルは、急速に蓄積されていた新しい資料や改善された知識に目を通し、新たにすべての問題に取り組んだ。しかしそれには、かなりの時間を要した。「国民経済調査会の能率的な援助にもかかわらず…最初の研究に要したよりもさらに多くの時間を要した」⁴⁾ というミッチェルの研究は、深められかつ拡大されていった。こうして彼の研究は、もはや当初もくろんでいた一冊ではおさまりがつかなかった。そこでひとまず彼は、その研究の一部を、一冊の著作にまとめて1927年に出版した。『景気循環——問題とその設定』(Business Cycles: The Problem and Its Setting) がそれである。

『問題とその設定』の序文には、「私は1913年にとつた方法よりも良いと思われる新しい研究方法を考案できなかった」と言うミッチェルが、彼の研究方法を総括的に述べた次の叙述が見られる。

「景気循環はかなり多くの経済諸過程間の極めて複雑な相互作用から成るものであるということ、これらの相互関係を見ぬくには数量的・質的分析と歴史的研究とが併せて行われなければならないということ、景気循環の諸現象は経済組織のある形式に特有のものであるということ、従つてその制度の機構を理解することが循環的変動の理解の前提となるということ、——これらの諸印象が景気循環の問題を（以前行ったよりも）もっと単純なやり方で取り扱おうとする私の努力によって一層確認させられたのである⁵⁾。」

この「確認」が、しかし実に広範囲に及ぶ新しい調査研究を通じてなされたの

である。かなりの厚さの独立の著作である『問題とその設定』が、600頁有余の旧著の第一部つまり最初の3章90頁に相当するにすぎなかったということ、何よりもこのことが、ミッチェルの調査ないし研究規模の大きかったことを物語っている、と言えるであろう。

『問題とその設定』への世人の注目は著しかった。ミッチェルの学者としての才覚を、専門家はもちろん素人も高く評価した。『問題とその設定』の第Ⅰ版はすぐに売り切れ、12度ものプリントがなされた。またそれはロシア語やドイツ語にも翻訳された。「国民経済調査会の出版物の中でこれ程の規模に達したものはない」⁶⁾と言われるゆえんである。ちなみに国民経済調査会は、ミッチェルの上掲書の出版(1927年)と前後して、『景気循環と失業』(Business Cycles and Unemployment, 1923)や『景気年報』(Business Annals, 1920),『近年の経済変化』(Recent Economic Changes, 1929)を刊行している。この刊行物のいずれにも、ミッチェルは有力な共同執筆者として参加している。

ところで『問題とその設定』の終章には、先に見た研究方法の総括的叙述の他に、景気循環の定義が示されていた。しかしミッチェルによれば、それは「研究作業を導くための概念」にすぎないものであった。従ってそれは研究の進展につれて常に修正を受ける定義なのであり、事実またミッチェル自身がその修正を行ってもいるのだ。その定義とは以下のようなものであった。

「景気循環とは、その仕事を主として営利企業で組織している諸国民の経済活動全体の中に見い出される変動の一つの型である。一つの循環は、ほぼ同時に多くの経済活動に生じる拡張、それに続いて起こる同様に全般に及ぶ一時的後退、収縮、および次の循環の拡張となって現れる回復から成る。この継続する変化は反復的であるが、しかし周期的ではない。景気循環の継続期間は、1年から10年ないし12年にまで及んで種々である。循環に近い振幅を伴い循環と類似の性質をもつものの継続期間を、ここに言う以上に短くは分割できない⁷⁾。」

この定義を導きの糸としながら、さらにそれを検討すべく、ミッチェルの研究は続けられる。それには、もちろん多くの資料が必要だ。そしてまた、この資料は分析されなければならない。かくしてここにその作業が開始された。いわ

ゆるミッチェルの旧著・『景気循環』第二部の改訂の作業である。

さて、「景気循環というものは著しく変化する諸現象の各種であるから私達はできるだけ多く観察することに努めた」⁸⁾とミッチェルが述べているように、膨大な資料が集められ、その分析が行われた。ところで、この分析を押し進めるには体系的な分析方法が必要であった。しかしそれは必ずしも整備されてはいなかった。とりわけ時系列の循環的動きを分析する方法がそうであった。ミッチェルがその新しい方法を『問題とその設定』の終章に素描していたことは確かだ。しかしこれも決して充分なものではなかったのである。それは分析を押し進めていく過程で多くの修正と改善を必要とした。この点で、とりわけバーンズやクズネックが協力した。しかしそうした作業が完全な形をとって示されるにはかなりの年月を要し、結局その成果が一著作としてまとめられ刊行されたのは1946年のことであった⁹⁾。膨大な統計資料とその体系的分析から成る『景気循環の測定』(Measuring Business Cycles)がそれである。これはバーンズと共著の形をとっていたが、とまれここに、ミッチェルの旧著第二部の改訂はなしとげられたのである。なお付言すれば、『景気循環の測定』と時を同じくして国民経済調査会は、『経済研究および経済学と公共政策の発展』(Economic Research and the Development of Economic Science and Public Policy, 1946)という書物を刊行している。ミッチェルもその共同執筆者の一人であった。

ところでミッチェルは早くも、『問題とその設定』が完成される1927年以前から、彼の「新しい手法によって分析され、見いだされた諸結果」を検討し始めていた。しかしこの過程で彼は、自分の知識に間隙のあることに気付いた。そのうちのあるものは統計的資料の徹底した収集によって埋められると考えた彼は、直ちに主要な経済諸過程の循環的動きの分析に着手した。この過程では、とりわけ経済諸過程の物的側面の分析に力点が置かれた。かくして1932年までにミッチェルは主要な経済諸過程の循環的動きに関するかなりの量の草稿を作成していた。しかしこの草稿に彼は満足できなかった。一度ならずそれを書き変えてもみたが、それでも彼には不満であった。彼は1937年の友人宛の手紙の

中でこうもらしている、「私は機敏な研究者ではない、またできるだけ良い形になすだけの研究の時間をもちえなかった材料を公にすることは私の好むところではない」と。企業と産業の実践に関する専門家の知識がどうしても必要だというのが、1938年頃にミッチェルが達した結論であった。かくして研究スタッフが増員され、新たに調査研究が進められた。そしてこの結果が『循環の動向の研究』(Studies Cyclical Behavior) シリーズとして刊行される運びとなったのである¹⁰⁾。

その頃ミッチェルは、『循環の動向の研究』に示された調査結果を基にして、景気循環とその諸原因を包括的に取り扱う体系的論著をとりまとめようとしていた。これこそ、いくたの計画や概念の変更をなしつつも、ミッチェルが最終的に目指していたことであった。それは、景気循環とは何か、景気循環はいかに典型的なコースをたどるか、またその動向はといった問題を理論的に説明することであった。いわゆる1913年の旧著第三部の改訂である。しかしながら彼にはその見通しがつきかねていた。当時のミッチェル自身の叙述を借りるとこうだ。「私は『循環の動向の研究』が書き進められていく間に、その調査結果を『事業活動のリズム』(The Rhythm of Business Activity) という書名になるはずの一著にまとめようと試みている。だがこの努力は、うまくいっても数年を要するだろうし、その完成に至るまで十分長く研究能力がもちこたえられるという保障はない。人あって今すぐこの作業を受け継いでくれたとしても、すみやかに完成するという保障もない。だから初版の第一部が直ちにより完全な改訂版に席を譲り、第二部がまさにその過程にあるのとちがって、第三部はそのような展望は全くない。」¹¹⁾ こうしてミッチェルは、1941年に旧著の第三部をそのまま再版したのであった。『景気循環とその諸原因』(Business Cycles and Their Causes) というのがそれである。

その再版に際して「第三部は景気循環内部で進行する事態をリアルに説明したものとして今なお価値を持っている」¹²⁾ と述べたミッチェルではあったが、しかし彼は決してそれをもってよしとしたのではない。彼の景気循環に関する体系的な論著を求めての努力は休みなく続けられていた。こうして彼は、景気

循環に関して彼がこれまで知りえたところを要約し、それを『中間報告』という形でⅡ巻の書物にまとめあげる計画をたてるに至った。思えば、ミッチェルが彼の『貨幣経済の理論』の原稿執筆を断念し、その理論のための「準備作業」ないし「導入」をなすものとして景気循環の研究を行う決心をしたのは、1908年のことであった。以来ミッチェルは40余年の歳月を景気循環の研究にささげてきたのであった。かくして今なお、未だ確定的な結論を下すべきではない、と彼は言うのだ。予定されたⅡ巻の書物の表題に彼が『中間報告』と傍記したのもそのためであった。「自己の権威を、と言うより自己の主張を、何もかつて強調せずに事例に従った指導者」ミッチェルという、小稿のはしがきで引用したシュンペーターの評言が、ここに真実味をもって迫ってくる。

さてミッチェルが『中間報告』と傍記して予定したⅡ巻の書物には、その各々に副題も用意されていた。最初のそれが「一にして多」(The Many in One), もう一つのそれが「多にして一」(The One in Many) というのであった。この最初の書物を執筆中にミッチェルは倒れ永久に帰らぬ人となったのである。1948年10月29日のことであった。第Ⅰ巻に予定されていた「一にして多」の原稿はほとんど完成されていた、と言う。これは、「さまざまな時系列指数を分類、整理し、総合的基準循環を導き出し、景気循環の現実の姿を統計的に描き出そうと」¹³⁾ したものであった。しかしこれとて、ミッチェルにしてみれば、彼の計画の一断片を成すにすぎないものであった。例えそうであったにしても、バーンズによれば、「現存の書物のどれ一つをとってみても、ミッチェルのその断片以上に、景気循環中において何が起るかということについて、このように完璧かつ権威をもって明白にしてはいない」¹⁴⁾ のである。このミッチェルの原稿は、彼の死後、国民経済調査会によって『景気循環の過程』(What Happens during Business Cycles) と題されて1951年に刊行された。

以上ミッチェルの国民経済調査会との係わりを、彼の景気循環の研究を中心にして見てきたが、以下に引用するミッチェルの死の数日後に彼の妻の許に届いた手紙の内容は、国民経済調査会におけるミッチェルの存在がいかに大きいものであったかを物語っている。その手紙は、国民経済調査会のスタッフを代表

してバーンズが書いたものであった。「1948年11月1日月曜日に開かれた調査会のスタッフの会合で、私は次のようなメッセージをあなたにお送りするようにと依頼されました。——今日は、ウエズレイ・ミッチェルのいない、我々の最初の会合です。我々の思いはすべて彼に集中しています。また同じく我々は彼の勇気ある奥様やお子様に思いをはせております。我々の誰もがウエズレイ・ミッチェルを愛していました。彼は我々のグループの創始者でした、彼は我々の教師であり、友人であり、指導者でした。彼は我々に真理を認識し、それを大切にし、それに従うことを教えました。彼は我々に、共に研究し、お互いに助け合うことを教えました。我々が過去に達成したもの、また将来なし遂げるであろうものは、彼の長年にわたる導きや教え、励ましのおかげなのです。」¹⁵⁾

<注>

- 1) Arthur F. Burns, ⑩, pp. 31—32 を参照。
- 2) W.C. Mitchell, *Business Cycles: The Problem and Its Setting*, New York, 1927, Preface, ix. 当著作の邦訳として、春日井薫訳『景気循環—問題とその設定』文雅堂書店、昭和36年がある。
- 3) 松尾博『ヴェブレンの人と思想』ミネルビ書房、昭和41年、47頁を参照。
- 4) W.C. Mitchell, *Business Cycles: The Problem and Its Setting*, Preface, ix.
- 5) W.C. Mitchell, *ibid*, Preface, x.
- 6) Arthur F. Burns, ⑩, p. 38.
- 7) W.C. Mitchell, *Measuring Business Cycles*, New York, 1946, p. 3, 当著作の邦訳として、春日井薫『景気循環—景気循環の測定』文雅堂書店、昭和39年がある。
- 8) W.C. Mitchell, *What Happens during Business Cycles: A Progress Report*, New York, 1951, p. 8, 当著作の邦訳として、春日井薫『景気循環の過程』文雅堂書店、昭和38年がある。
- 9) Arthur F. Burns, ⑩, pp. 39—40 を参照。
- 10) このパラグラフは主に Arthur F. Burns, pp. 40—42 を主に参照。
- 11) W.C. Mitchell, *Business Cycles and Their Causes*, Berkley, 1941, 種瀬・松石・平井訳『景気循環』新評論、1972年、2頁。
- 12) W.C. Mitchell, 上掲訳書、2頁。
- 13) W.C. Mitchell, 上掲訳書、訳あとがき、277頁。
- 14) Arthur F. Burns, ⑩, p. 43.
- 15) Lucy Sprague Mitchell, ⑩, pp. 192—103 から引用。

VIII

さて、1920年に国民経済調査会と係わりあって以来のミッチェルは、もっぱら彼の旧著『景気循環』の拡充と一新を中心とした調査研究を行ってきた、と言ってよい。しかしだからといって、単にそれのみに彼の時間が費やされていたわけではない。新社会科学学院の講師の職を退き、1922年に再びコロンビア大学へもどったミッチェルは、そこを名誉教授として退職する1944年までの間に、多くの論文を書いている。以下その代表的なものを年代順にあげれば次のものがある。

- ① Making Goods and Making Money, 1423年.
- ② The Prospects of Economics, 1924年.
- ③ Quantitative Analysis in Economic Theory, 1925年.
- ④ Sombart's Hochkapitalism, 1929年.
- ⑤ Thorstein Veblen, 1929年.
- ⑥ Postulate and Preconceptions of Ricardian Economics, 1929年.
- ⑦ Institutes for Research in the Social Sciences, 1929年.
- ⑧ Research in Social Sciences, 1930年.
- ⑨ Economics, 1931年.
- ⑩ The Social Sciences and National Planning, 1935年.
- ⑪ Commons on Institutional Economics, 1935年.
- ⑫ Intelligence and the Guidance of Economic Evolution, 1936年.
- ⑬ The Public Relations of Sciences, 1939年.
- ⑭ Economic Resources and Their Employment, 1941年.
- ⑮ National Unity and Individual Liberties, 1942年.
- ⑯ Economic in Unified World, 1944年.
- ⑰ Facts and Values in Economics, 1944年.
- ⑱ The Role of Money in Economic History, 1944年.¹⁾

こうしたミッチェルの代表的諸論文は、ドーフマン (J. Dorfman) によって

『貨幣支出の未開的方法とその他の諸論考』（The Backward Art of Spending Money and Other Essays）と題されて、1937年に編集・出版された。それは、上記の①から⑫までの論文と、それ以前に書かれた5本の論文²⁾から成っていた。これらの諸論文では、例えば②③⑦⑧⑩⑫等では、企業と国家の関係や社会福祉の向上を目指す国家経済計画の必要性、そのための経済の現実の量的・統計的分析の必要性等々が論じられていた。明らかにミッチェルは、「一種の社会改良的思想を抱き、経済学をもって富の科学の代りに人間の福祉の科学たらしめようとしていた」³⁾のである。とすれば、彼のこの志向が従来の経済学とりわけ古典派経済学の立場と相入れないものであることも明らかだ。

ミッチェルの反古典に通じる姿勢は、すでに彼の処女論文に現れていたが、彼の上記の⑥の論文は、リカード（D. Ricard）の経済学の前提を批判的に検討し論じたものであった。また、ウィーザーを問題にした論文の末尾に見られる次のミッチェルの古典派批判の叙述は、いわば裏返しの形で彼自身の立場を示したものであった。

「自分は制度を研究しているのだとわかっている人は、その研究を歴史的展望の下で行う。例え彼が、その分析を、制度がその進化のある特定の段階でとる形態に限るにしてもである。そうすることによって彼は、知識の閉鎖的体系を提示する代りに、将来の探求に導く展望を切り開く。彼は、ある人の個人的経験が人間の行動を理論化するのに十分な根拠となる、と惑わされて信じることはない。むしろ彼は、彼の問題に何らかの学問分野——統計学、民族学、心理学等——によって投げかけられる照明から利益を受けることを望むのである」⁴⁾。

ここに言う「利益を受けることを望む」人、その人が他ならぬミッチェル自身であった。要するに彼は、「知識の閉鎖的体系」を提示する多くの伝統的経済学は誤っている、と言うのだ。単にそれが機械論的だからだと言うのではない、余りにも機械論的であり、制度的展望を欠いているからだ、と彼は言うのである。かくして経済学における制度の歴史的研究の必要性を強調するミッチェルは、上記した④⑤⑫の論文において、ゾンバルトやヴェブレン、コモンズ⁵⁾を高く評価し、彼らに親近感を示したのである。広い意味に解すれば、彼らは共

に反古典の立場に立って、何よりも制度の歴史的研究を重視した、いわゆる制度主義者であった。

ところで、コロンビア大学におけるミッチェルは、良き研究者であると同時に良き教師であった。「ミッチェルの講義に参加した人は誰一人として、その時に抱いた期待と興奮の思いを忘れないであろう」と言うミルスは、ミッチェルの良き教師としての資質について、次のように述べている。「分析における洞察力があった。彼が決して失うことのなかった視野の新鮮さがあった。思考と表現の明晰さがあった。研究課題を学生と分かち合えがあった、なかんずく恐らく統合のセンスがあった。正直に理解を求める、気どりのない、てらいのない一人の男がいた」⁶⁾と。こうした資質に裏打ちされたミッチェルの講義が、多くの学生を魅了するものであったことは疑いない。ミッチェルの講義には、世界各国から留学してきていた多くの大学院の学生が集まっていた、と言う。比較的少数のクラスでなされたと言われる学説史の講義におけるミッチェルは、再びミルスの叙述を借りると、「偏見にとらわれない巧みな説明者であり、議論の指導者であり、批判的評価の刺激者であった。彼のクラスの取り扱いは一丁重であり刺激に満ちていた。彼の解釈は我々のほとんどに意外な新事実を啓示するものであった。社会史の事実や、特定の理論が形づくられた時代を支配した政治的見解の傾向の性格、これらの時代を貫いている哲学思想の系譜といったものが、種々の理論の前提——意識的であれ無意識的であれ——をなすものとして体系的に展開され、明るみに出された。ミッチェル自身の見解は、講義の最後における以外はさし控えられていた。もっともそれは含意と間接的な示唆から必然的に明らかになったのであったが。」⁷⁾

そうして講じられたミッチェルの経済学説史の内容については、幸いその詳細を、『経済理論の諸型態——重商主義から制度主義まで』(Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism) という著作において見ることができる。もっともこの著作は、ミッチェル自身の手によって出版されたものでもなければ、また当初からそうした著作として公にされたものでもなかった。もともとそれは、謄写版印刷の形をとって1934—35年に密に配布されて

いたと言われる、ミッチェルの学説史の講義を聞いた一学生の速記ノートに始まる。この速記ノートが、ミッチェルの死後、ケリー（Augustus Kelley）によって若干の改訂をほどこされて1949年に出版された。『経済理論の諸型態に関する講義ノート』（Lecture Notes of Types of Economic Thought）というのがそれである。これを後にドーフマンが大幅に改訂ないし増補し、Ⅱ巻本として1967年に出版した。これが上述の『経済理論の諸型態——重商主義から制度主義まで』であった⁹⁾。

それによるとミッチェルは、およそ過去の学説は制度主義の経済へ向けて変化・発展してきた、と解しているのである。このことを確認させ、つまりは経済学における制度の研究の重要性を認識させること、これがミッチェルの経済学説史の目的であった、と言ってよい。つまりミッチェルは『経済理論の諸型態』の終章で次のように述べているのである。

「経済学は人間行動の科学であるという事実を我々はますますしっかりと把握したであろう……経済学は人間行動の科学であるという考えをもって進むならば、制度的諸力が行動の中で演ずる役割に対して注意が集中されていることに我々は気付くであろう……従って経済学の研究者が現在を研究する場合に主要な問題を見出し、将来について考える場合に主要な希望を見出すのは、これら習慣——制度——においてである⁹⁾。」

経済学を「人間行動の科学」と解し「制度的諸力が行動の中で演ずる役割に対して注意を集中」した人が、ミッチェルによれば、ヴェブレンでありコモنزであった。彼らは、『経済理論の諸型態』の副題・「重商主義から制度主義まで」にいう、「制度主義」の経済学者に他ならなかった。とまれミッチェルのその著作は、かなり彼独自のものであったわけだが、「シュンペーターの『経済分析の歴史』の刊行まで、アメリカのすぐれた経済学者達の中の一人によって考えられたものとして、それは学説史の進歩という点において唯一の記録であった」¹⁰⁾とされている。

ところで、これまでのミッチェルをふり返ってみると、何よりも研究者・科学者としての彼の姿が浮び上ってくる。ミッチェルは、彼の妻の表現を借りれば、「気質としては科学者であり、職業としては経済学者、必要に応じて統計学

者であった。』¹¹⁾そして彼は常に理論家であった。それも、理論は仮定された前提ではなく、観察された・記録された人間行動の分析的研究に基づかなければならない、と固く信じていた理論家であった。ここに言う観察と記録を正しく行う道具として、彼は統計を重視し、またかかる道具を発展させることに努めたのであった。つまるところ彼は社会改良家であった。研究者・科学者としての彼の仕事を導いた究極の目的は、社会組織の改善であり改革であった。彼は実際、種々の社会問題に関与すると同時に、実に多くの社会的活動を行ってきたのである。とりわけコロンビア大学に赴任して以後の彼はそうであった。

国民経済調査会や、戦時産業局の物価部、新社会科学学院等において、ミッチェルが指導的役割を果たしたことについてはすでに見た。しかし彼の社会的活動はそれにつきない。ミッチェルは、種々の進歩的・人道的運動に積極的に関わった他、長期間にわたって、社会科学研究審議会 (the Social Sciences Research Council) や教育実験局 (The Bureau of Educational Experiments) の仕事にも尽力したのである。それに加えて彼は、1929—33年の間を、フーバー大統領の社会動向研究委員会 (Hoover's Research Committee on Social Trends) の委員長として奉仕した。また彼は1933年にはルーズベルト大統領によって国家計画局 (The National Planning Board) のメンバーに任命された。そして1934—35年の間は彼は国家資源局 (The National Resources Board) や連邦臨時公共事業調査会 (Federal Emergency Administration of Public Works) のメンバーも兼ねていた。1937年には彼は、時の財務長官の特別助言者としての役も務め、1944年には生計費委員会 (Committee on the Cost of Living) の委員長として奉仕した。著名な科学者・経済学者として彼はまた、アメリカ経済学会、アメリカ科学推進協議会 (The American Association for Advancement of Science) 等の諸団体の会長も務めたのであった¹²⁾。

当然そうしたミッチェルが受けた栄誉は大きかった。彼は、合衆国の主要な大学から、つまりシカゴ、コロンビア、プリンストン、ハーバード、ペンシルバニア等の大学や、新社会科学学院から名誉学位を授与された。また彼は、彼がその最初の人であると言われている、アメリカ経済学会のウォーカー賞 (Francis

A. Walker Medal) を与えられた。これは「経済学に最も顕著な貢献をした生存中のアメリカの経済学者」に、ほぼ5年間隔で授与される賞であった。さらにミッチェルは、合衆国においてのみならず、諸外国においても榮譽ある取り扱いを受けた。彼は、王立統計協会(The Royal Statistical Association)の名誉会員や、A・スミスの学んだ古い大学・ベルリオルカレッジの会員にも任命された。それに彼は、パリ大学からも名誉学位を授与されたのであった¹³⁾。

以上、その生涯において「人類への奉仕」¹⁴⁾に通じる数多くの仕事をなしたミッチェルは、1948年10月29日金曜日の早朝、多くの人々に惜しまれながらこの世を去ったのである。時に73才であった。

<注>

- 1) 以上の論文や小稿の他の箇所では引用している論文の掲載雑誌等については、㊦, pp. 343-366 に詳細なミッチェルの著作目録が収録されているので、その参照を乞う。
- 2) その5本の論文とは下記のものである。The Backward Art of Spending Money, 1912年。The Role of Money in Economic Theory, 1916年。Wieser's Theory of Social Economics, 1917年。Bentham's Felicific Calculus, 1918年。Statistics and Government, 1919年。
- 3) 小原敬士『アメリカ経済思想の潮流』勁草書房、昭和26年、220頁。
- 4) W. C. Mitchell, Wieser's Theory of Social Economics, in The Backward Art of Spending Money and Other Essays, p. 256. 当論文は最初、Political Sciences Quarterly, V. 32, March 1917 に掲載された。
- 5) 例えば「集団行動は、ヴェブレンのいわゆる支配的な思考習慣と同様に、累積的变化の産物である。コモنزは、その歴史的進化を注意深く研究する」(The Backward Art of Spending Money and Other Essays, p. 339) とミッチェルは、ヴェブレンやコモنزが思考習慣や集団行動(制度)の変化の歴史的な研究を重視している点を、高く評価しているのである。
- 6) Frederick F. Mills, ㊦, pp. 113-114.
- 7) Frederick F. Mills, ㊦, p. 113.
- 8) こうした状況については、Wesley C. Mitchell, Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism, ed. with an introduction by J. Dorfman, Augustus M. Kelley Publishers, New York, Vol. I, 1967, pp. vii-xi に詳しい。
- 9) この引用は、小原敬士『アメリカ経済思想の潮流』勁草書房、昭和26年、217頁からした。但し、必ずしもそのままではない。
- 10) Henry W. Spiegel, The Growth of Economic Thought, Prentice-Hall, Inc., New Jersey, 1971, p. 635.
- 11) Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p. 69.
- 12) 13) このパラグラフは、Arthur F. Burns, ㊦, pp. 50-51, Joseph Dorfman,

㊦, p. 136 を参照。

14) Frederick C. Mills, ㊦, p. 124.

(完・1980, 4)